常磐東小学校　校長だより

常なる磐

つねなる　いわ　seasonⅢ

令和　４年　４月 23 日(土)
その２　通算 222 号

◇ 再生力❷

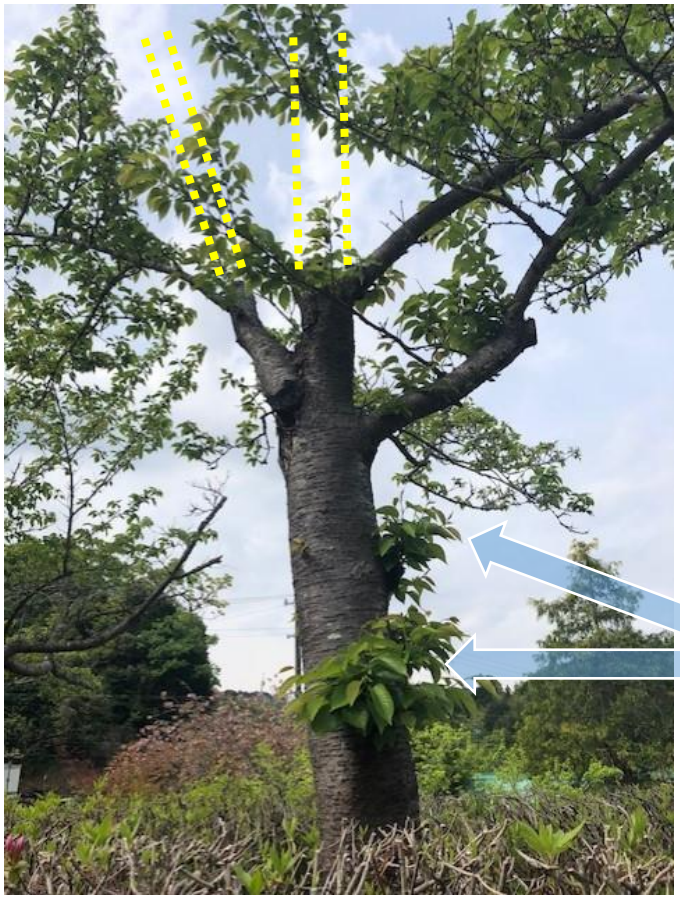
ほぼ同角度から撮影した「桜階段のソメイヨシノ」２枚の写真。

撮影時期が異なるため葉の付き方は異なるが、大きな違いはそこだけではない。**赤破線〇**内の位置を左写真と見比べると、Ⓐ と Ⓑ２ 本の太枝が無い。これはウメノキゴケの繁殖による枝枯れがあり、白 S 字状に已(や)む無く切断したことによる。
※切断面には墨汁を湿布し、保護処置が施してある。

ウメノキゴケによる本校樹木の被害は甚大(じんだい)で、桜階段のソメイヨシノをはじめ、三河黒松や紅白梅、ヤマボウシ、木蓮(もくれん)は、枝先の枯れや未開花、未結実、立ち枯れなど、ありとあらゆる成長阻害(そがい)を受けていた。影響が出なかったのは、コケとの相性からか、幹に繁殖しない銀杏(いちょう)やアメリカフウぐらいである。

空気がきれいな場所でなければ成長しない、それでいて樹木には無害との定説があるウメノキゴケだが、コケの除去前後で樹木の状態を比較すると、後者説は大いに疑念が残る。

校務主任の加藤先生と山田校務員が中心となり、樹木に繁殖したウメノキゴケを高圧洗浄機でこまめに除去しはじめたのが、ちょうど２年前。コケの除去年に開花数や前年比大幅増（※倍どころではない、５ 倍である）の梅の収穫量など、すぐにコケの除去効果が確認できた紅白梅にくらべて大きな変化のなかったソメイヨシノだが、２年後の今年、驚くほどの変容を見せている。



左写真は、別角度からぐっと寄って撮影したもの。

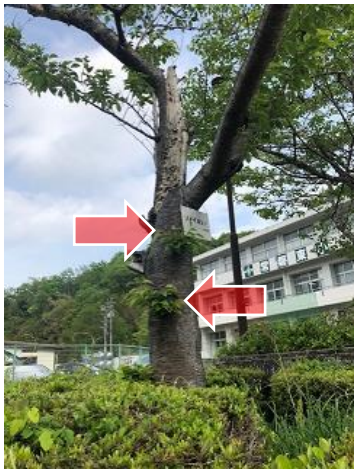
黒々とした桜らしい幹が、良好な健康状態を物語ってる。
それだけではない。驚くべきは、幹を断ち切られたことにより、樹木自体が備える生命力が、新たな生長を生んだ。

枝分かれとは異なる「新生長点」。

昨年までなかった、太い幹自体からの生長点。今春、これがいくつも、そして逞しく表出してきた。

すっかり「こんもり状態」である。

幹の生長点が確認できるのは、このソメイヨシノだけではない。桜階段の５本のソメイヨシノ全ての幹に確認できる。
しかもご覧のように、１本から何か所も（赤➡）である。



つまり一昨年と昨年は、ソメイヨシノの【体力温存年】だったのだろう。

長きにわたって苦しめられたウメノキゴケ。除去されたことはよいが、枝どころか幹も切り落とされてダブルのダメージを受けた。この両者を癒すために、ソメイヨシノには２年の年月が必要であり、今年の春になって一気に生気を甦（よみがえ）らせたのではないかと思われる。

人も同じである。

今春のソメイヨシノの再生を目の当りにし、再生・再出発に要する充電期間の必要性、そして適切なケアの重要性について改めて考えさせられた。